

高浜虚子と『阿波のへんろの墓』

Kaigo Keuchi 池内 恵吾



西ノ下の旧居跡近くにある虚子の胸像と句碑。「道のべに」の句も、この句碑に併刻されている。奥に大師堂が見える。

愛媛県北条市は、標高九八六メートルの高縄山に源を発する四つの川に沿って開けた田園都市である。その一つ、河野川の河口に近い国道一九六号線に面した小さな大師堂の前に、高浜虚子の胸像と句碑がある。

この松の下に竹めば露のわれ

虚子

昭和三年に建立された、最初の虚子句碑。かつてここにあり、いまは枯れてしまった県指定文化財の「遍路松」を詠んだ句だ。

虚子は、明治七（一八七四）年松山に生まれ、生後間もなくから数え年八歳までの幼年期を風早郡別府村柳原西ノ下と呼ばれたこの地で過ごす。松山藩の剣術指南役であった父池内信夫が、同志四人でここに移住して農業を始めたのである。「虚子自伝」の冒頭「西の下」に、こんな一節がある。

「私の家は畑の中に四軒竝んであるその一番北のはづれの家でありました。（中略）私の漸き物心がつき始めた時分に目に映ったところのものは、それらの山や海でありましたが、そ



虚子によって再建された「阿波のへんろの墓」。

の他、家の前を通つてをる街道に、南無大師遍照金剛……と聲を長く引つばつて、杖を突いて来る遍路の姿がありました。（中略）橋のたもと

の堤の上に、大師堂がありました。その大師堂のほとりに石が立つてをりまして、その石に「阿波のへんろの墓」と古風な字で刻んでありました。」

毎日のように母の膝から眺めた遍路の姿。阿波からはるばる伊予路まで巡つて来て道端の土となった、哀れな物語のありそうな遍路の墓。それらは幼い虚子の心に深く刻まれ、のちに虚子の文学の原点の一つとなったと思われる。六十一歳のときに詠んだ、

道のべに阿波の遍路の墓あはれ

虚子

からも、幼いころから抱き続けた遍路への思いが惻々と伝わって来る。

虚子が「ホトトギス」昭和十三年十二月号に発表した『阿波のへんろの墓』は、その年帰省して西ノ下の旧居跡を訪ねたときの模様を記した文章である。四百字詰め原稿用紙八

枚ほどの内容に、六十四歳の虚子の幼時を懐かしむ心情が鮮やかに綴られている。

「私の幼時育つた舊居は此の大師堂の松から二十間ほか離れてゐないので、街道に面して建てをつたのであるが、私が八歳の時一家を擧げて松山の城下に歸り、其あとの家は打ち毀たれ、其時から今に至るまで麥や大根を作る畑となつた儘で居るのである。」

このあと、虚子は二、三歳ころのわが身に起きた一つの「事件」に触れている。ある夕方、家の前で遊んでいた虚子を、女の遍路が抱き上げて大師堂あたりまで連れ出してしまふ。折りよく顔見知りの女の子が通りかかつて、虚子は無事に母の手に返された。

「母はその女の遍路は丁度私ぐらの年頃の子供を亡くして悲しみのあまり四國遍路に出たものであつて、私とその子供に似ても居つたのであらう、懐しきのあまり抱いてふらふらとこの松のほとりまで行つたものであらう、と其後よく私に話して居つたのを聞いたのであつた。」四十八歳という高齢出産の子であ



虚子が祖母とともに防風を摘んだ西ノ下の海岸から鹿島を望む。

った虚子への、母の心理的影響がうかがえる一節だ。

さて、このときの西ノ下再訪で、虚子は新たな「事件」に遭遇する。あの阿波の遍路の墓が、いつの間にか消失していたのである。

〈暫して私は大師堂の横手に在る遍路の墓を見ようと思つて松の裏手に廻つて見た。(中略)ところが他の二三の墓石、それも何の墓石か判然しないが、其等の墓石は曲つたなりに立つてをったが遍路の墓は一向に見當らなかつた。〉

虚子は、なかば冗談めかしながら地元の友人の責任を追及するが、墓がなくなつたことに大きな衝撃と愛惜の念を禁じ得なかつたようだ。

『阿波のへんろの墓』につづき、『西ノ下の甘藷』『又風早西ノ下のこと』を昭和十四年二、三月号の「ホトトギス」に寄せ、その中でも阿波の遍路の墓が失われたことに憤慨している。

阿波の遍路の墓は、昭和三十年、八十一歳の秋、虚子自身の手で再建された。現存のものがそれである。再建の経緯は、翌年三月号の「ホトトギス」に記された。もの心ついたころの記憶に刻まれた西ノ下と遍路

の墓への追慕の念は、虚子の心から生涯消えることはなかつたのである。

虚子は、俳壇の巨人であると同時に、小説や写生文でも輝かしい業績を残した。子規の枕頭での文章会「山会」が、修業の場であつた。虚子の小説「柿二つ」は、漱石の「吾輩は猫である」、伊藤左千夫「野菊の墓」、長塚節「土」などとならぶ山会の成果といわれている。一時期小説に専念し、新聞小説でも成功をおさめた。

数多い虚子の文章の中でも、『阿波のへんろの墓』は私のとくに好きな小品だが、虚子が執筆した年齢に達して読み返し、あらためて心に沁みる思いがするのである。

いけうち、けいこ 松前町出身。元愛媛放送取締役。俳句雑誌「春耕」に、「近世伊予俳人列伝」「明治伊予俳人列伝」などを執筆した。引き続き同誌に「伊予俳句風土記」を連載中。俳人協会会員 放送批評懇談会会員。